

田名テルクグチの「チチャ」について

久部良 和 子

A consideration for the “*Chicya*” of *Tirukuguchi*, Dana Township in Iheya Island

Nagiko KUBURA

伊是名島・伊平屋島総合調査報告書、沖縄県立博物館・美術館 別刷

2019年3月15日

Reprinted from Survey Reports on Natural History, History and Culture of
Izenajima and Iheyajima Islands, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum

March, 2019

田名テルクグチの「チチャ」について

久部良 和 子*

A consideration for the “Chicya” of Tirukuguchi, Dana Township in Iheya Island

Nagiko KUBURA

「神々と伝説が息づく島、琉球王朝のルーツ」と言われる伊平屋島は、沖縄県最北端で与論島の西方海上に浮かぶ細長い島である。伊平屋島には「クマヤー洞窟」や「屋蔵墓」など「第一尚氏王統発祥の地」に纏わる伝説が数多く伝えられている。それを実証する文献資料は少ないが伊平屋島は「古琉球から近世琉球」における重要な島である。

島を代表する祭祀に旧暦7月17日に行われる「ウンジャミ」と「シヌグ」という航海安全・子孫繁栄及び豊穰を祈願する海神祭りがある。島の最北端田名集落のウンジャミで歌われる神歌に「テルクグチ」という古謡があり、歌詞の中に「チチャ」という地名が何か所か登場する。

チチャに鬼界とふりがながふられて歌われ、「鬼界(チチャ)」は、伊平屋島東方海上にある喜界島のことだという。

『伊平屋村まつり』によると、むかしチチャ(鬼界島)のノロを乗せた船が、首里からの帰途伊平屋島の東方海上で遭難し、そのノロを伊平屋島の人々が救助し介抱して厚くもてなし、送り返したことに由来するのだという。

田名テルクグチの歌詞「チチャ」が現在の喜界島のことなのか、現在の伊平屋島と喜界島の住民は互いの島をどのように認識しているのだろうかという興味をもった。伊平屋島の東北方向、黒潮の流れに沿って北上すると一番近い島は与論であり、その次に見えるのは奄美大島である。喜界島は奄美大島の東側に位置するため、地図の上では両島間にはいくつも

島がありそんなに交流が行われたのだろうかという疑問である。

神送りの行事は各地にあり、喜界島ノロの話は後に付会したのではないかとされている。¹

「ウンジャミ」祭りは、最初田名屋の火の神を拝み、その庭で神を歓待し、村はずれから馬を連れて神送りをする。最後に、東海岸の岩の上から東方海上に向かって神を送るのである。夕方、再び田名屋に神役や部落役員が集合し「テルクグチ」という古謡を歌って行事は終了する。この「田名テルクグチ」²の歌詞は

島親ぬ御前居て、国親ぬ御前居て
吉賀利事しやりら、果報な事しやりら
我が兄弟いもうり、我が姉妹いもうり
果報な事しやりら、童名や何名
奥の名や何名、屋蔵百持ちやうり
頭あんゆより、初の子はてだやうり
奥の子は土やり
テルクミがはじめ、ナルクミがのだて
うくからどはじめ、うくからどのだて
鬼界ぬ島ゆより、金ぬ島ちちようら
田名ぬ子がかけ島、田名ぬ子がええ島
しむし酒ふさてい、ひるま神酒ふさてい
徳の世の主が、徳ぬ若按司が・・

(後略)

現在、田名集落では「テルクグチ」を歌える人は殆どおらず、神主が楽譜(帳面)に記録し祭り時に唱えているとのこと。しかし、神主でさえ「チチャ

（喜界島）」についてあまり詳しいことはわからない。また伊平屋村伝統民謡保存会関係者（80歳）にも「チチャ」が喜界島のことなのか訊ねたが新たな情報は得られなかった。更に島滞在中に60代以上の男性数人に聞いたが喜界島には一度も行ったことはないとのことであった。

ところが、伊平屋島在住の陶芸家によると毎年島に流れ着く漂着物は黒潮の流れよりも北風に乗って流れ着く朝鮮半島の漂着物が西海岸に大量に流れ着いているとのこと。それは、伊平屋島の地形や環境が大きく影響を受けている。西海岸には古い集落跡が多く、島の地形や景観、廃村の跡から曾ては北や周辺地域からもっとも上陸しやすい地域で、古集落の跡があり、昔、北方から流れ着いた人々の住んでいたのではないかという³。

このように考えるてみると「チチャ」は東方の全般を示すもので、「チチャ」が「現在の喜界島」と断定することはできないが、漠然とした北東方向と交流があったことの名残りではないかと思われる。

文献記録こそないが「古琉球」時代にも多くの遭難事故が起こり、「ウンジャミ」に歌われ、テルクグロにみられる東方海上の情報伝承が生まれる可能性は十分に考えられる。

一方、喜界島の人々は、沖縄本島伊平屋島のことをどのように認識しているのだろうか。

『喜界町誌』には「沖縄県の最北端で、与論島の西方海上に浮かぶ細長い島、物語の舞台である伊平屋島で、この島の田名集落では「ヌイシジチ」という特殊な行事が毎年旧暦の7月17日に行われているが、この行事の由来について「喜界ノロ」との関係が僅かだが触れられている。

今回、喜界島の郷土史研究家に尋ねたが、伊平屋島との関連性はあまりよくわからないとのことであった。

しかし、文献にみられる「キカイガジマ」の一覧をみると10世紀から15世紀にかけて「キカイガジマ」を指す用語（字）が変遷していることがわかる⁴。

【キカイガシマの用字の変化】⁴

用 字	出 典
貴駕島	『日本紀略』長徳四年（998）九月十四日条
貴賀之島	『新猿楽記』11世紀半ば頃成立
喜界島	『長秋記』天永二年（1111）九月四日条
貴海島	『吾妻鏡』文治三年（1187）九月二十二日条
貴賀井島	『吾妻鏡』文治四年（1188）二月二十一日条、三月五日条、五月十七日条
貴賀島	建久三年（1192）二月二十八日付頼朝下文写（佐田文書）
鬼界が島	『宝物集』（1189～1200？）
鬼海島	『保元物語』承久（1219～1222）頃成立、その他
貴賀国	『漂到琉球国記』（1244）
鬼界島	『平家物語』『八幡愚童訓』など、多数
鬼界島	『中山世鑑』（明）成化二年（1466）
鬼界島	『海東諸国記』（1471成立）

上記表に見られるように「キカイガシマ」には、複数の用字が表記として使用され、「キカイガシマ」が示す場所や領域は、必ずしも一様ではなく、その範囲は琉球孤（薩南諸島・琉球諸島）の海域一帯と重なる範囲と考えられる⁵。

琉球王国時代各地域の古謡を採録した「おもろさうし」には「大島七間切 喜界五間切 徳永良部与論 那覇の地の内」と唄われている。これらの古謡から喜界島の野呂（ノロ）にも琉球国王の辞令書が下賜され、喜界島との祭祀における影響を窺い知ることができる。喜界島の野呂は、一生に一度首里に参上して聞得大君に拝謁し朱印（辞令）と勾玉を拝領したと言われ、伊平屋島田名に伝わるテルクグチの中で謡われる「ききや」の地名がいくつか散見されることから、古琉球の人々は頻りに交流が行なわれていたことを伺い知ることができる。

また、『おもろさうし』（巻十旅歌のさうし）にオシカサという女神官が奥渡より上（奄美地域）などへ使いた時のことを歌ったおもろが次のように収録されている。

（前略）

又喜界の浮島 喜界の盛り島
又浮島から 辺留笠利かち

又辺留笠利から 中瀬戸内かち
又中瀬戸内から 金の島かち
又金の島から せちよさにかち
(後略)

このおもろには、オシカサという中央の女神官が公務をおびて、まず喜界島に直行し、その後辺留笠利に到着。同地を発った後、中瀬戸内・かねの島(徳之島)・せりよさ(沖永良部)・かいふた(与論)を經由し、以下沖縄の各地を経て最後に親泊(那覇港)に帰港し、即日首里城に登城して、帰任の報告をするまでの旅の経路を歌ったものである。

『喜界島城久遺跡報告書』によると、14世紀後半から15世紀前半以降、沖縄的な文化要素の北上は、神アシャゲや拝所、ノロ殿内の発掘調査などによりトカラ列島まで及んでいたことが明らかになってきた。この頃になると喜界島も徐々に沖縄文化圏に取り込まれるようになり、1466年第一尚氏の尚徳王時代に「ききや」(喜界島)は政治的にも琉球王朝の支配下に入るといふ歴史に重なっていることが伺える⁶。

喜界ノロが、在任中に首里へ上がり、聞得大君に拝し、直接貢納船に乗船することもあった。また、ノロばかりでなく役人や多くの若者たちも夫役のために駆り出された。そのようなことからノロの琉球への往来はかなり頻繁であったと推測され、田名のテルクグチは、15世紀以降の首里王府と喜界島を往来していた野呂(ノロ)の証跡を表しているのではないかと思われる。

琉球史における「古琉球」とは極めて曖昧な時代概念である。しかし、これまでは神話や伝承、古謡等の世界観で語られることが多かったが、今後考古学調査の進展により、東アジアを含む海域や人とモノの交易が明らかになれば、「古琉球」の実態が更に解明されることだろう。

今回、2018年3月15日～3月16日、同年11月14日～15日に伊平屋島調査を行い、11月17日～19日に喜界島調査を行った。

いずれも短い滞在であったが、琉球王国時代の古謡である「テルクグチ」の中にも伊平屋島の人々と海を隔て奄美諸島と人々の交流が自由に往来していた一旦を垣間見ることができた。少なくとも「古琉

球」時代における伊平屋島調査は、奄美諸島との交流の歴史を抜きには語れない。

調査にあたっては、伊平屋村教育委員会、喜界島在住の郷土史研究家・生島常範氏に大変お世話になった。記して感謝したい。

註

- 1 上江洲均『伊平屋島民俗散歩』p104 1986年
- 2 西銘仁正氏の提供による歌詞
- 3 伊平屋村字田名公民館建設記念事業期成会『伊平屋村 田名字史』p26 平成15年
- 4 永山修一「キカイガシマの時代—文献から見る古代・中世の南島—」P10 2015年
- 5 高梨修「琉球史の南北—喜界島城久遺跡群から見た琉球—」p75『琉球 交叉する歴史と文化』2014年
- 6 喜界町教育委員会『城久遺跡群総括報告書』P58 2015年
- 7 島山篤「ウンザミ・シヌグー伊平屋島田名の年中行事」p67『沖国大南島文化研究所 伊平屋・伊是名調査報告書』1984年

